

前田河広一郎「戦碑」読解

鍵本 有理 高橋 美帆

A Reading of Koichiro Maidako's "The Monument"

Yuri KAGIMOTO and Miho TAKAHASHI

During his stay in US (1907-1920), Koichiro Maidako (1888-1957) left some novels and essays in English. Among them, "The Monument" shows a striking message against war, which Maidako would not have dealt with if he had been home. This paper presents its first Japanese translation as well as its introduction, and casts a new light on Maedako's basic principles such as pacifism, anti-imperialism, and what is called 'art for art's sake'.

1, はじめに

前田河広一郎 (1888 (明治21) 年～1957 (昭和32) 年) については今日、プロレタリア小説「三等船客」(1921 (大正10) 年) と、師事した徳富蘆花についての評伝「蘆花伝」(1938 (昭和13) 年) 等の作者として知られるぐらいであろう。

しかし、かつて青野季吉が「三等船客」を賞賛したうえで、「最近アメリカの現代文学の翻訳をつづけて読んでみると、前田河の作品にどことなくアメリカ文学の体臭があるやうに感じられてならない。前田河があの逞しさでずつと描きつづけてゐなかつたことが惜しまれる。」(『現代日本小説大系』第四十巻、1951年9月、河出書房、解説p.321) と評しており、前田河の存在が当時のプロレタリア文学運動において重要な位置を占めていたことは否めない。

前田河は日本で作家として活躍する以前に、アメリカで様々な労働生活を経験しながら、いくつかの英文小説を発表している。このことが前掲の青野の言う「アメリカ文学の体臭」や「逞しさ」の元になっていることは言うまでもない。この在米時代に書かれた英文小説について、これまで拙稿¹⁾で論じてきたが、本稿では“The Monument”(「戦碑」)を取り上げ、これら英文小説に共通する素材やテーマについて考えることとする。

2, “The Monument”(「戦碑」) 紹介

本作品は、在米の社会主義者金子喜一の妻であるジョ

セフィン・コンガー・カネコ²⁾が主宰する雑誌“The Coming Nation”に1913(大正2)年12月発表された。原文の英文はすでに西村頼男により紹介されており³⁾、ここではまず以下に拙訳を掲げる。人名については片仮名表記とした。

戦碑

雨が降っていた。しかし、年老いたゴローさんは、碑を彫り始めた。ゴローさんはその谷間(たにあい)では名うての彫刻家だったが、右手に軽い震えが走るのを感じた。それは老いと病いの兆しだった。それでも彼は、その右手で切り立った石の表面をトントンとたたき、崇高な悲しみを抱く人のように、悲しげな微笑を浮かべた。

古い工具を手にし、脳裏に文字を刻みつけながら、彼はぼんやりと、自分の魂の巨大な静寂を感じていた。それは吊いの静寂であり、まるで宝庫に着々と進んでいく鼠のように、鋭い歯のようなものがコリコリとかじりながら、だんだんと深く入り込んでいく音が聞こえるような静寂だった。その動悸を打つような熱っぽい鼓動、苦痛を伴うその軽快な接近は、あたかも本能的に己の魂の激痛から逃れようとしているかのように、彼の生命の半ばを高揚させているように思われた。

どんな悲しみも、いや、妻の死さえも、彼の精神をこれほど動揺させたことはなかった。それに、どんな石も、まるで悪魔がその中に姿を隠しているかのように無口で無情で、抵しがたい悪意と皮肉に満ち、これほど挑発的に彼の前に立ちはだかつたことはなかった。外面を見ると、毛深くむさ苦しい容貌で、その潤んだ眼の中に

は、いわく言いがたい憎しみが瞬きながら流れていた。陽に焼けた堅い筋肉は、目には映らないものの、ひきつっていた。内面では、五感が職人となって、頭領である狂乱状態の彫刻家の命令のもと、目方を量り、寸法を測り、槌で打ち、斧で割り、鑿（のみ）で彫り、想像上の抵抗勢力に対して精を出しながら、自分の心の炎を石板の上に刻むのだった。

そして、ゴローさんの鋼のごとく不屈の気質は、秘めた悲しみに白熱したように思われた。その気質の長所である生来の器用さでもって、ゴローさんは周囲に大理石の粉をまき散らした。しばしの緊張した瞬間のあと、最初の文字が完成した。それは巨大な「戦」という漢字だった。

その文字は、碑の堅い石肌に深く刻まれていたので、さながら短剣が木の幹に食い込むように、小さな鑿が碑の本体にぶら下がっていた。これに対して、老いた彫刻家は心から笑った。額から滴り落ちる雨しぶきを拭いながら、長い間感じていた復讐心のようなものが、半ばやり遂げた仕事の興奮と奇妙に入り混じり、彼を陽気にさせていた。そして彼の笑いは、錯乱した人の発する絶叫のように、かすかな金属音の中で石碑を打った。

次に彼が彫らなければならない文字は、自分の息子の名前であった。

スズキ セイゾー！ セイゾー！

少しの間、ゴローさんはずぶぬれになった顔を石碑から背け、自分の抱える一連のさまざまないびつな感情を避けた。その感情は、何千もの傷や傷跡で十文字に傷を付けられ、癌に冒された巨大な胃袋の脹らみのように、隆起していた。その数多の傷のせいで、彼は純然たる悲しみというよりもむしろ苦痛に襲われていた。

雨が少し小やみになった。険しい渓谷の流れによって傾き、向こうの曲がりくねった道は粘土のようにじっと固まり、藁葺き屋根の黒い淀みが、この陰気な、霧の漂う、幽霊の出そうな雰囲気の中に描き出されていた。あちらこちらに、背の高い松の木が、はかなく漂う霧を吸い込みながら立っていた。その木の上には、柔らかな雨が二すじ三すじ、鉛筆のような細い線となって光っていた。次第に、暗緑がかかった谷の盆地の広がりがかっきりと姿を現し、濡れた小さな田舎家の数かずは、遠くにある眠りそうな波と同じように、見えたり見えなかったりした。

嬉しげな雄鶏の鳴き声が、誰もいない円形演技場さながらの大きな磐梯山の形に沿って、縫うように響きわたった。

どこかずっと下の、巨大な山の中腹あたりから、岩だらけの川がかすかに絶え間なく流れる音が聞こえた。ゴローさんは65年間、この川の流れの織り成す憂いに満

ちた交響曲を聴いてきた者の一人だった。

一度か二度、柔らかな閃きがゆらめく瞑想のひと時に、彼はこの川の流れを、人生の始まりと終わりにたとえたことがある。惨めな隠遁者のように、希望も果たされず、喜びも得られず、名は文明の世に知られぬ、という奇妙な半ば精神的な苦痛とともに、その遠い曲がりくねった道の終わりを見つめるのだった。栄光、富、名声、安楽、帝国、芸術——こうしたものが川の流れの終わりで、彼を待っていた。だが、ゴローさんはそこへ行かなかった。彼の烈しい野望が失われたからではなく、彼の腕前が衰えたわけでもなかった。修道僧のように独善的な諦念の哲学のうちに自らを閉じこめ、永遠に絢爛たる経歴を捨てて村の彫刻家といううらぶれた職に身を置いたのは、ひたすら彼の息子のためだった。息子セイゾーのためだけに、ゴローさんはこの谷間にとどまったのであった。

この小さな川は、秋には緋色、冬には紫黒色を纏い、幾つもの眠れぬ夜を、父親の男らしい犠牲を、ゆっくりと夢が実現されるという希望とほんやりとした幸福な思いを、これまで語ってきた。しかし今や、すべては堆積した霧の中に深く埋められていた。

「ああ、息子よ、俺の息子よ、どうして死んでしまったのか。骨の髄まで、お前は俺の一部だった。俺を置いて死ぬ権利などまったくないはずだ！ そうだ。お前にはそうする権利は全くなかったのだ。何が？ 戦争か？ 犠牲か？ 日本か？ ああ、だがお前は戦うために生まれてきたのではない。お前の祖国はこの地上にはなかったのだ。もしお前が戦うために生まれてきたのだとしたら、石や大理石を相手にするためだ。満州で、ロシア人を相手にするためではないのだ。ああ、俺の姿を見てくれ、この有様を見ろ！ 何てこった。俺はお前を送り出すために、人生を捧げて20年間もの長い間準備してきた。そして今、この鑿をお前の墓のために研いでいるなんて！ お前の墓！ かわいそうなセイゾー！ お前の墓だ！」

.....

「ここにいたぞ。おい！ ゴローさん。またセイゾーのことを考えていたのか？」

「そんなに悩むなよ。この碑を完成させる前にまた病気になるぞ。」

「こんなにひどい雨の日にも彫っているのか！ どうして少しも休まないのかい、ゴローさん？」

「やあ、なんて勢いのある碑銘なんだ！ この文字！ 何かと戦っている！ 身構えた虎が龍の喉笛を狙っているようだ。まさしく快拳だ！ おめでとう、ゴローさん！」

ゴローさんが振り向くと、村人たちが5人おり、半ば

完成した碑を囲んでいた。控えめに感じやすい様子で、悲しそうな笑みを浮かべて、彼らに頭を下げたので、ゴローさんの口元の皺はほころび、誇り高い顔つきから厳格さが少し和らいだ。

彼が再び鑿を手にしたとき、町役場の村会議員が、抜け目ないイナゴのような顔でニコニコ笑いながら、彼に近付いてきた。

「あせているんだね。」議員は同情して頷いた。「わかっているよ。ゴローさん、でも、あんまり無理はするなよ。知っての通り、この谷間の村人は皆、この碑が完成するのを願っている。もしあんたに寝込まれたりした日には、この地方で碑を彫る者は他にもう誰もいない。それに、我々は、これがあんたの最高傑作として仕上がるのを望んでいる。というのも、この碑は我々の谷の榮譽を永久に象徴するものになるんだからね。」

「ああ、全くだ。あんたの息子さんのような、勇敢な愛国心を持った若人が満州で国のために死んだのに、それ以上の榮譽が考えられるかね。息子さんの立派な死、無比の犠牲心、祖国の旗を染めるために流した尊い血——ああ、それはこんな碑が百以上あっても足りないほど価値がある！　ところで、政府からあんた宛てに手紙が来てるよ。名誉年金の知らせだと思う。ゴローさん、もしそうなら、声に出して読んでくれないか。我々もそれを聞いて誇らしくに思えるように。」

動作はのろいがおしゃべりなこの賞賛者が、濡れた袂から赤い封筒を引っ張り出した時、ゴローさんのうつろな目は翳りを帯びた。その節くれ立った手が分厚い手紙に触れた時、ほとんど生気のなかった頬に、おずおずとした赤らみが浮かんだ。

「政府から通知があるとは、思いもしませんでした。だって、戦争が終わって4ヶ月の間、息子のように戦死して新聞に名前が載った者は、皆直ちに通知を受け、報奨が与えられておりますから。」

「まあ、戦場の混乱の中では、このような遅れを引き起こす原因はたくさんあると思いますよ。特に奉天では、日ごとに何百人もの人が虐殺されているのですから」と、口ひげを生やした足の短い青年教師が、どちらかといえば冷淡に解説をした。ゴローさんはこの公報の遅れをいささか訝しく思っていた。例えば、隣り村のサイトウは旅順で死んだのだが、遺骨が届くやいなや、両親は報奨を受け取っていた。

しかしながら、その封筒を破って開ける前、ゴローさんは遠く夢見るような眼を閉じた。彼の魂の暗い隅にある、荒削りの印象の周縁に作り上げられた、セイゾーの生涯の取るに足らない細部に至る無数のことが、次第に湧きあがる音の塊のように、次々とよみがえってきた。

最初、それは暗示じみたものであった。それから徐々に、ひとつひとつの感情が周縁を成し、ひとつひとつの追憶が歌を奏で、ひとつひとつの思いが陰影を強めた。ついには、激しさは限度を超えて苦しみは一面に広がって、ゴローさんはその場に息子の息遣いを感じるほど動揺していた。

幼いあの子が死んだ母親を恋しがって泣いていた、小さな粘土作りの窓辺。少し大きくなったあの子が、泥細工のモデルにした野良犬。しょっちゅう着替えては遊んでいた小さな着物姿、その着物は父親が近所の主婦に頼んで仕立ててもらったものだった。毎日仕事場を横切っていた、馬具の緩んだ背の曲がったやせ馬。その馬は息子の記憶に長く深く留まっていた。というのも、あの子が最初に鉛筆でスケッチしたのはその馬だったから。それから、気だてのよい石運搬夫、魔法の箱を開くように次々と幽霊の話をしてくれた。庭の小さな花壇は色とりどりの鉢のようで、その中には時折銀色の雨が悲しげに映った。少年の気持と大きな磐梯山の山面の情趣との間にある優しい精神的な関係。赤い柿が聞いた歌。日の当たる壁の上を群れをなして飛ぶトンボ。有史以前の銅鑼が響く静かな竹林。特別な友情の始まりとして、息子が新しい客にいつも見せるカバンにいっぱい詰まった素描。白い砂利道。退屈で単調なカーブを描く線路。ペンキの臭いの染み付いた駅の、興奮で賑わった喧騒。最後の別れの挨拶。それから、野生の鴨の鳴く悲しい日々。雪に埋もれた不幸な運命の狼たちの鳴き声。そして、最後にこの知らせが届き、老人の弱った心に致命的な打撃が加えられた——こうしたことがすべて互いに繋がり響き合って、息子の姿がいつそうはつきりと甦ってくるように思われた。

ああ、誰が息子を殺したのか、誰があの子を殺したのか？　敵兵が！　戦争が！　泥棒のように息子を引きずり込み、黒ずんだ胴体とこわばった足以外何も残らなくなるまで、弾丸を浴びせたのだ。何の権利があって？　ああ、息子を殺した怪物のような敵！　戦争め！

「ほら、日が出てきたぞ。」急に誰かが彼のそばに近付いて、大声で叫んだ。ゴローさんは夢から覚めた。磐梯山脈とその丘陵は、海のように立ち込めていた霧を脱ぎ捨てようとしていた。斜めに差し込んだ一筋の光が、その未完成の碑の上半分を照らした。ゴローさんの震える手がしわくちゃになった封筒をぐいっと引き裂いた。そして彼はその手紙を、何度も何度も、それ以上読んでも仕方のないくらいまで繰り返し読んだ。

こうして沈黙がひとしきり続いている間、切れ切れに映る景色から素早く雲が投げ出されていた。と、突然、ゴローさんのむせぶような眩きによって、沈黙が破られた。

「皆さん、この碑に息子の名前を彫れなくなりました。」

魔法にかかったようにぼうっとしている村人が何か問いかける間もなく、彼は黙ってその碑から歩き去った。その顔は夕暮れの川のように青ざめ、頬には涙がとめどなく流れていた。村人達はゴローさんが置いていったその手紙を拾い上げ、陸軍省から彼に宛てられた次のような通知を読んだのだった。

「拝啓 我々陸軍省は、心痛の極みであるが、貴殿に以下のように通知する。ご子息であるスズキ・セイゾーは、万事において皇軍の兵士としてその資質を欠いており、六箇月前、戦場の軍則に従い、日本国家に対する反逆者として我々によって処刑された。ヴェレシチャーギンなるロシアの無政府主義画家の絵を模写している、まさにその現場を取り押さえられた。その画家の反軍国主義的思想は、祖国の運命以上にご子息を惹きつけたものである。

奉天における我が軍全体の必要な結束を熟慮した結果、この極刑は非難されるものではないと考えている。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

この日以来、磐梯山の広大な地域において、この谷間の老彫刻家の姿を見たものは一人もいない。ゴローさんは死んだという者もいれば、川を下って広い豊かな世界へ向かって行った、という者もいた。しかし、雨が降って、霧が谷間に立ちこめる日にはよく、遠い彼方から音が聞こえてくる。まるで、あの未完の石碑に鑿を入れるときの音のようで、村人たちは、ゴローさんがまだそこで彫っているのだと言う。

そして、太陽がその光を山々にみなぎらせる日には、あの恐ろしい碑銘「戦」を刻み付けたまま、石碑は穏やかに文明社会を見下ろしている。

3, 素材とテーマ

3.1 本作品についての言及および評価

前田河本人はこの作品について、自伝『青春の自画像』(1958年5月、理論社)の中でその内容を、

『戦碑』というのは、日露戦争で死んだ一子の名をとどめようとして、一人の老石工が、山の上に碑を刻んで立てる。落雷で石工は急死して、名を刻まぬままに、碑は戦争の文字だけを残して立っている。(p.133)

と述べている(「落雷」とあるのは前田河の記憶違いであろう)。

またこの小説を書いた当時、英語で文章を書くことに苦労しており、自分の小説に対する批評をある古本屋の主人に求めたところ、

その主人は、私の書いた『戦碑』を読んで、けげんな顔をして、『私は英国育ちの人間で、英語で書いたものはたいがい読んでいるが——』と前置きして『ラテン系の文字が、貴公の文章には多過ぎる。散文を書くならば、ゼフェリスのようにアングロ・サクソン語で書くといいな。』と云って、小型の『わが心の物語』をとり出して、その書き出しを朗読して、しまいには私にその本をプレゼントした。(同 p.134)

という出来事があったと紹介している。そして、やはり在米時代、ある雑誌出版者を訪ねたところ、自分の作品の朗読会をすることになり、

その晩、かれこれ三十四五人の女を主とした集りにむかって、私は、旧作『Twentieth Century』、『Monument』、『Unity of Asia』とを朗読した。可もなし、不可もなしである。

と述べている。他の英文作品同様、後の彼にとっては「恥」であったのであろう。

しかし、中田幸子が本作品について、

「モニュメント」とは、日露戦争において奉天で戦死した日本兵士の記念碑で、これを磐梯の山懐でひとり刻む老いた父親の話である。息子の二十年の命はロシア兵と戦うためではなかった筈だ、と父親の無念は深い。彼を気遣う村人たちが、陸軍省からの通達を持ってやって来た。人々が褒賞を期待したのに反して、それは、当人は帝国陸軍兵士として失格で六ヶ月前に軍事裁判で日本に対する裏切り者として処刑された、と伝えるものであった。理由は、彼はロシアのアナーキスト画家ヴェレシチャーギンの絵を写し、その反軍国主義思想にかぶれて、祖国の運命を軽んじた、ということである。父親は碑文を刻むことをやめ、以後姿を消してしまう。

静かな東北地方の自然の中での父子の愛情が切々と語られ、反戦思想がはっきり底流にあり、前田河の本質に近いものが感じられる作品である。(『前田河広一郎における「アメリカ」』(国書刊行会、2000年10月、p.58)

と評しているように、後の前田河作品に通じるテーマが見られる。それはまた、他の英文作品にも共通して言えることであり、以下にその題材について考察する。

3.2 前田河の英文作品に見られる素材とテーマ

まず、本作品に出てくるロシアの画家、ヴェレシチャーギンについては、すでに中田幸子が、

人道主義者で生涯非戦的絵画を描いたヴェレシチャーギン(1842~1904)は、クロボトキンに従

って来日したこともあり、露軍艦ペトロパウスクが日本軍の水雷で轟沈したとき、マカロフ提督とともに旅順沖の水層となったことで、明治時代末期の日本人には知られていた外国人である。

と述べ、徳富蘆花と前田河がこの画家の影響を受けていたことを指摘している（前掲書『前田河広一郎における「アメリカ」』、p.58～59）。

前田河の他の英文小説“The Mikado's Crane-room”（「ミカドの鶴の間」）と“The Twentieth Century”（「二十世紀」）ではともに画家が主人公であり、前田河本人がもともと絵画に興味を持っていたこともすでに述べた⁴⁾。そして、本作品でも主人公となる老人は彫刻家（石工）という芸術家であるし、ヴェレシチャーギンの絵を写したかどで処刑された彼の息子セイゾーについても、幼い頃犬をモデルに泥細工（‘mud-study’）をし、最初に描いた鉛筆書きのスケッチ（‘the first pencil sketch’）が馬であったとあり、絵の才能に恵まれた、芸術を志す人物であったことがほめかされている。

そうすると、この息子セイゾーが絵を写していたというくだりも、ヴェレシチャーギンの思想性云々というよりも、もともと絵画を愛する、兵士には向かない性根の優しい人物が、「無実」の罪により処刑されたという悲劇性のほうが重要視されてよいのではないか。これはやはり前田河の英文小説“The Hangman”（「絞刑史」）が、大逆事件を題材とし、しかも物語の内容としては、いわば一人の労働者である絞刑史が、仕事としてやむなく社会主義者たちを処刑した後自責の念から死んでしまうという悲劇を描いているのと共通する面がある。そして事件の当事者より、周辺の人物・残された人々を中心に物語を展開するという手法も“The Hangman”と同様のものである。

また、時代設定は“The Twentieth Century”と同様、日露戦争の時期としており、舞台はやはり日本であるが、東京ではなく磐梯山の麓である。ちなみに前田河の生まれた1888（明治21）年に、この会津磐梯山は大噴火を起こしている。宮城で生まれ育った前田河にとって、同じ東北地方のこの山は馴染みのあるものであったのだろう。

そして、物語の最後は、「石碑は穏やかに文明社会を見下ろしている」と結ばれる。この「文明社会」（‘civilization’）という語もやや唐突な感があるが、“The Twentieth Century”が近代化社会そのものの醜さを描き、また“A New Year Street in Yeddo”（「江戸の正月」）が江戸の街を舞台としながらも「快樂主義の」（‘epicurean’）、「悦樂を好む」（‘pleasure-loving’）近代西洋社会への批判を含んでいるのに共通するものであ

る。その後の彼の代表作「三等船客」が、「作品の底からは近代文明にたいする人間的な怒りといったものが、強く押ししてくる感じ」（青野季吉『現代日本小説大系』第四十巻、1951年9月、河出書房、解説p.321）と評される、その根本となる思想がすでにこの英文小説の時代に確立されているといつてよい。

4, むすび

以上、“The Monument”の読解を通して、前田河の英文小説において早くから近代社会への批判が見出せることを述べてきた。

前田河本人は「恥」としている英文小説であるが、それらを読み解くことにより彼の日本文による小説が「プロレタリア文学」というジャンルにとどまらず、近代資本主義社会への批判といった面を持つこと、また彼の芸術に対する考え方の素地といったものを探ることができるであろう。

《注》

- 1) 拙稿「前田河広一郎「二十世紀」論—在米日本人作家の再評価—」（奈良工業高等専門学校研究紀要第38号、2003年3月）、「前田河広一郎「ミカドの鶴の間」読解」（奈良工業高等専門学校研究紀要第39号、2004年3月）、「前田河広一郎「江戸の正月」読解—比較文化的視点からのアプローチ—」（奈良工業高等専門学校研究紀要第40号、2005年3月）。
- 2) 小久保武「金子ジョゼフィン伝抄」（『本』2（7）1977年7月）に彼女の生涯がまとめられている。
- 3) 「《資料紹介》前田河広一郎の英文による短編」（『札幌商科大学論集 人文編』第32号、1982年12月）。本稿の日本語訳については西村頼男氏のご厚意により、この英文テキストを使用した。記して感謝の意を表す。
- 4) 拙稿「前田河広一郎「二十世紀」論—在米日本人作家の再評価—」（注1に同じ）p.144参照。

